

---

# 無償の愛を得るには

赤いトマト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無償の愛を得るには

### 【Nコード】

N8988Z

### 【作者名】

赤いトマト

### 【あらすじ】

失恋したと思えば異世界に。拾ってくれたのはお金持ちの貴族でした。不器用な二人の少しだけ真面目な話。

## 01 (前書き)

突発物。更新はわかりません。

ああ、これは終わったな。

「友達でいた時のほうが楽しかった。」絵文字も顔文字もない、それだけの文章のメールに「分かった。またね。」とだけ送り返し、自分の部屋のベッドに突っ伏す。

たったそれだけのことなのに、私の恋は終わりを告げたのだ。

友達でいた時のほうが楽しかった、なんて、私を振るための口実だとすぐに分かった。

けれど、それを言及する気にならなかったのは、いつかこうなることを最初から理解していたからかもしれない。

好きな人が居るといつていた彼に告白して、その場の勢いで付き合い合うことになって、けれどあの人が見ていたのは私とは違う女の子で、じわり、と涙が溢れてきて視界が歪んでいく。

それを止めようと手で涙を拭うが、次から次へと涙は出てベッドのシーツを濡らしてしまった。

なんて惨めなんだろう、私の頭の中には元彼になった彼と、私と付き合い合う前から好きだと言っていた彼女の姿。

きつと私と別れた彼は彼女と付き合い合う。彼女も彼のことを悪くは思

ってないだろうから、彼の申し出を断ることはないと思う。

「好きだったのにな…。」

泣き疲れたのか、睡魔がやってくる。眠い。

目を開けていられない。

だんだんと遠のいていく意識の中、私は握っていた携帯を手放した。

目を開けると見知らぬ天井が広がっていた。

どうやらあのまま眠ってしまったらしい、服は少し皺がよっている。

「……………」

上半身を起こし辺りを見回す。

大きなシャンデリア、ダブルぐらいの大きさのベッド、細かな装飾のされた家具。どれも見覚えのないものばかりだ。

洋風のこの部屋は映画で見たヨーロッパの貴族の部屋に似ていた。

「夢でも見てるのかな…。」

現実逃避にも程がある、そう呟いて両手で顔を覆った。

感触はちゃんとあってこれが現実だということが分かる。

けれど今の私には全てのことか億劫だった。

私の頭の中は彼のことかでいっぱい自分置かれてる状況にまで頭がまわらない。

思い出すとまた、涙が出そうだった。

鼻の奥がツンとする感覚を感じながら涙をこらえる。

と、控えめにドアをノックする音が聞こえた。

「…………だれ…、」

キィ、と音を立てて開くドアの隙間から出てきたのは、薄い金色の髪を持つ綺麗な青年であった。

多分、私と同じくらいか、少し上くらいだろう。きついイメージを持たせる少しつり気味の目は青色をしている。

「起きたのか。」

思ったより低いその声に私は肩をビクリと震わせた。

「え、あ、…はい。」

「…………。」

「…………。」

会話が續かない。

青年は私のことを無表情でじっと見つめていて、私はその視線に耐え切れず俯いた。

この状況は一体なんなのだろう。

彼が私をここに連れてきたのか。

誘拐？にしては豪華な部屋だ。私を誘拐しても身代金の額は期待できないだろう。私の家は良くも悪くも一般的な家庭である。

「…………泣いたのか？」

沈黙を破ったのは彼のほうだった。  
そういえば少し目が腫れぼったい。

「あの…………はい。」

「そうか…………、何か冷やすものでも持ってくる。」

君はそのままそこに居ていい、と言い残して出て行こうとする彼に  
「あの！！」と声をかけて引き止める。首だけこちらを振り返った  
青年に私は「えっと、」とどもってしまふ。

「お名前、聞いても、いいですか…………？」

「……………ギルバート。」

「ギルバート？」

私がそう聞き返すと彼は「ああ」と頷いて、そのまま部屋を去って  
いく。

ギルバート、さん。

口だけ動かして名前をもう一度呟いた。聞きなれない横文字の名前。彼のことは名前以外何も分からなかったけれど、多分、悪い人ではない。そんな気がした。

ふと、窓が目に入る。窓に近寄り、外を見た。

「…………え…？」

ヨーロッパのような、けれど車やビルのような現代的な町並みではなく、映画で見たようなレンガ造りのファンタジーめいた街並みが広がっていた。

道を歩く人達はドレスやタキシードのような服を着ていて、私が知っているような薄い服を身に纏っている人はいない。

「ほんと、何処に来ちゃったんだ…。」

彼、ギルバートが帰ってきたのは、そのあと暫くしてのことであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8988z/>

---

無償の愛を得るには

2011年12月28日05時45分発行